

アメリカの環境教育

歴史と現代的課題

荻原 彰 著

ネイチャー・スタディーや自然保全教育、野外教育といった三つの源流から誕生したアメリカの環境教育の紆余曲折する歩みと、「学力重視」や「環境正義」の新たな波にさらされ、その在り方がどう変貌してきたのかを平易に解説した好著である。

「環境教育の衰退と再生」(第3章)や「苦

アメリカの環境教育

歴史と現代的課題

荻原彰



発行 学術出版会

発売 日本図書センター

2940円

03・3947・9387

学力向上へどう寄与するか

関する環境教育―批判者たちとの戦い」(第4章)などは政治的な立場の違いの間で揺れ続ける様子が分かる。90年代の環境教育の非科学性、一部のプロの団体支配などの批判によって、「環境教育はその実践性や価値観重視の特性がより露わになったといえる」。

「新しい危機」(第5章)ではNCLB(おちほれを作らないための初等・中等教育法)によって学力重視の教育へと転換し、「無駄な時間」と切り捨てられる苦境を跳ね返す。学力向上に寄与できる在り方を求め、全米環境教育プログラムの策定につなげる。環境を汚染する工場と動かざるを得ない貧困層の「差別」「公正」という意識と環境教育が結び付く時、飛躍のチャンスが訪れる(第6章「環境教育と正義の問題」)。

こうした動きを踏まえながら、著者が提起する、日本国内での学力との関連についての実証研究や、環境教育内容のスタンダード開発などは、われわれが今問われる課題である。(矢)